

紙芝居で演じる／絵本で読み聞かせるの違いに関する研究

—同じ物語を事例とした比較分析を通じて—

浅井 拓久也・正 司 顯 好

A Study on the Difference Between Playing by Kamishibai and Reading by Picture Book:

Through the Comparative Analysis of Each Type of *BABY CHICK*

ASAI Takuya, SHOSU Akiyoshi

キーワード：紙芝居と絵本の違い、感性分析、計
量テキスト分析、共起ネットワーク

1 研究背景と課題設定

本稿の目的は、保育者養成校の学生が紙芝居と絵本それぞれで同じ物語を聞いた場合、物語の受け止め方にどのような違いがあるかについて検討することである。本研究によって、紙芝居と絵本の特徴、効果をいっそう明確にし、保育の場面や状況に応じた紙芝居と絵本の使い分けに対する示唆を得ることを目指す。

紙芝居と絵本はいずれも児童文化財に含まれるものであり、並列に語られることが多い。保育所保育指針解説（2018）には、言葉の獲得に関する保育について、「絵本や紙芝居を楽しみ、簡単な言葉を繰り返したり、模倣をしたりして遊ぶ」、「保育士等や友達と共に様々な絵本や物語、紙芝居などに親しむ中で、子どもは新たな世界に興味や関心を広げていく」と示されている。この記述に限らず、解説の中では紙芝居という言葉は9か所登場するが、いずれも絵本という言葉と並列になっている。

このように、紙芝居と絵本は並列に語られることが多いが、異なるところも多い。金城・掃盛（2016）によると、紙芝居には脚本・台詞があること、紙芝居は個人で楽しむより大人数で楽しむ

ものであること、舞台を用いること、抜くという行為があることを列挙している。絵本とは異なり、紙芝居には演技力、適切な演じ方が必要であることも指摘している。

また、清水（2007）は紙芝居の特徴とその効果をまとめている。たとえば、紙芝居の抜くという行為によって静止画として描かれている人物やものに動きを与えることができるため、その場面がいま目の前で起きているようにみせる効果があると指摘している。また、紙芝居は絵本と比べると「解りやすさ」、「面白さ」の質が高く、家庭教育教材として取り入れることができることも紙芝居の可能性として提示している。

しかし、紙芝居と絵本は多くの異なる点があるにもかかわらず、これらは保育の中ではあまり意識されていない。鬘櫛・野崎（2010a）は、保育者の多くは送迎バスの待ち時間のような保育の隙間を埋めるためのつなぎの道具として紙芝居を使っており、紙芝居の魅力を引き出せていないことを示している。また、野崎他（2012）は保育者を対象とした調査から、多くの保育者は紙芝居の特性や魅力を活かした演じ方になっていないことや、紙芝居の使い方を理解しないまま絵本と同様の使い方をしていることを明らかにしている。このように、紙芝居は多くの保育者に知られており保育の中で使われてはいるが、絵本との違いについて十分に理解されていないのである。

この背景には、保育者養成校の授業や保育者対象の研修会などで紙芝居と絵本の違いを伝えきれていないこともあろうが、紙芝居の研究が十分ではないことも大きな要因である。八幡（2007）は、紙芝居の研究は「未だに途上」とであると指摘している。実際、紙芝居に関する研究は数が少ないことに加えて⁽¹⁾、紙芝居と絵本の比較を中心とした実証的な研究はほとんどなされてこなかった⁽²⁾。すなわち、紙芝居と絵本の違いについて理論的に整理したり理念型として提示したりするにとどまり、その違いが保育者や学生にどのように理解されているか、紙芝居と絵本の違いによって物語の受け止め方がどのように変わるかについては検討されてこなかったのである。そのため、紙芝居と絵本の違いを学ぶ側の認識や理解をふまえた紙芝居と絵本の違いの効果的な説明や具体的な指導ができていなかったのではないだろうか⁽³⁾。

以上から、本稿では、紙芝居と絵本の違いについて着目する。もちろん、紙芝居と絵本のすべての違いを取り上げて検討していくことは現実的ではない。そこで、紙芝居で演じた物語と同じ物語を絵本で読み聞かせた場合、物語の受け止め方にどのような違いがあるかについて検討する。具体的には、自由記述の内容や出現した言葉に着目し、紙芝居で演じた場合と絵本で読み聞かせた場合それぞれの肯定的な受け止め方と否定的な受け止め方や、そのキーワードはどのようなものかを明らかにしていく。

本問の結論として、何かしらの捉え方の違いを抽出できることは容易に予想できる。しかし、ここで重要なことは、どのような違いが認識、理解されるかということである。自由記述には調査対象者が捉えた違いすべてが記述されるのではなく、最も印象に残った違いが記述されるであろう。物語を紙芝居で演じた場合と絵本で読み聞かせた場合の違いとして、違いそのものがあるかないかではなく、どのような違いが最も認識されるか、その違いがどのように表現されるかを明らかにすることが、紙芝居と絵本の違いを学ぶ側の認識や理解を把握することにつながるのである。このよう

に、同じ物語でも紙芝居で演じる場合と絵本で読み聞かせる場合に生じる受け止め方の違いを具体的に明らかにすることで、保育の場面や状況に応じた紙芝居と絵本の使い分けや紙芝居の独自性をふまえた活用につながる示唆を得ることができると思われる⁽⁴⁾。

2 研究方法

(1) 調査概要

調査対象者は、指定保育士養成施設である短期大学生 111 名であった（1 年生 108 名、2 年生 3 名）。

調査は、保育実習指導 I（180 分）の授業内で『ひよこちゃん』という物語を用いて行われた。まず、調査対象者が紙芝居の『ひよこちゃん』（原作：チュコフスキー、脚本：小林純一、絵：二俣英五郎、出版社：童心社）を聞き、続いて絵本の『ひよこちゃん』（原作：チュコフスキー、文：小林純一、絵：二俣英五郎、出版社：いかだ社）を聞いてから、質問紙に記入するようにした。

質問紙への記入は無記名式で行い、『ひよこちゃん』を紙芝居で聞いた感想と絵本で聞いた感想を自由記述するよう求めた。質問紙の回収率は 100% であった。

(2) 分析方法

本稿では、同じ物語を紙芝居で演じた場合と絵本で読み聞かせた場合の受け止め方の違いについて明らかにすることであった。そこで、『ひよこちゃん』という同じ物語を紙芝居で聞いた感想と絵本で聞いた感想の自由記述を分析データとして採用した⁽⁵⁾。分析ソフトとして、IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4 と KH Coder 3 を用いた。

具体的な分析手順は次の通りである。まず、紙芝居で演じた場合と絵本で読み聞かせた場合のそれぞれの肯定的な意見と否定的な意見を明らかにするため、感性分析を行った。感性分析とは、記述中の快感・不快、肯定・否定、良い・悪いなど

人間の心の動きや評価を表現している箇所を抽出する分析方法である。感性分析では、最大で81種類の感性タイプに分類できる。本稿の分析目的は紙芝居と絵本による物語の受け止め方の違いを抽出することであるため、それぞれに対する気持ちや評価を表現している箇所が重要となる。そこで、感性分析によってポジティブ（肯定的な見解、報告、感性表現をまとめたもの）とネガティブ（否定的な見解、報告、感性表現をまとめたもの）のカテゴリに分類された記述を抽出した⁽⁶⁾。

次に、紙芝居と絵本のポジティブなカテゴリとネガティブなカテゴリに類出する言葉やその関係について明らかにするため、KH Coder 3による分析を行った。KH Coder 3を使用した理由は、自由記述を単語や句に分節し、出現数や単語間の相関関係を抽出することができるからである。自由記述の分析ではKJ法が採用されることが多いが、分類や分析枠組みの設定のさいに研究者の主観や仮説に影響を受けやすいという問題があった。KH Coder 3では、共起ネットワークなどを抽出するさいに出現数やJaccard係数の閾値を設定するが、これらを除けば自動的に抽出が可能となる。また、共起ネットワークによって、記述内で出現パターンが類似している（共起している）単語やその関係を明らかにすることができる。共起ネットワークを確認することで、紙芝居で聞いた感想と絵本で聞いた感想が整理できるのみならず、両者の比較が容易になる。なお、本稿では出現数は4以上、Jaccard係数の閾値は0.3に設定した⁽⁷⁾。

（3）倫理的配慮

調査対象者が質問紙に回答する前に、調査目的と内容、回答は学術研究の目的でのみ使用され成績評価とは関係がないこと、無記名による回答であり回答者は特定されないこと、回答は途中で放棄することや提出を拒むことができることなどを質問紙の冒頭および授業担当者によって口頭で説明した。回答の提出をもって受講者の同意を得たとした。

3 結果と考察

（1）感性分析

まず、感性分析の結果を表1（紙芝居）、表2（絵本）としてまとめた（表1、表2）。どちらの表でも、ポジティブとネガティブのカテゴリ、各カテゴリの下位カテゴリ、各カテゴリに分類された記述（一部）を整理した⁽⁸⁾。

まず、表1から、『ひよこちゃん』を紙芝居で聞いた感想はポジティブに分類されたものが76件、ネガティブに分類されたものが2件であったことがわかる。また、表2から、絵本で聞いた感想はポジティブに分類されたものが43件、ネガティブに分類されたものが25件であったことがわかる。

次に、ポジティブ、ネガティブのそれぞれの下位カテゴリを確認していく。まず、紙芝居で聞いた感想に対するポジティブな下位カテゴリを見ると、「安心」（1）、「快い」（2）、「良い」（30）、「満足」（31）、「楽しい」（8）、「褒め・賞賛」（13）、「期待」（1）、「喜び全般」（1）、「対応が親切」（1）、「楽しみ全般」（2）、「好き」（1）であった。ネガティブな下位カテゴリは、「不満」（2）だけであった。一方、絵本で聞いた感想に対するポジティブな下位カテゴリを見ると、「快い」（2）、「良い」（24）、「満足」（11）、「楽しい」（3）、「褒め・賞賛」（9）、「好き」（3）であった。ネガティブな下位カテゴリは、「不快」（1）、「不満」（15）、「批判」（1）、「悪い」（8）であった。紙芝居でも絵本でも、ポジティブな下位カテゴリは「満足」、「楽しい」、ネガティブな下位カテゴリは「不満」などのようにほぼ共通であった。

以上の結果から、物語を紙芝居で聞いた場合は、ネガティブな感想はあまりなく、ポジティブな感想がかなり多いことがわかった。また、絵本で聞いた場合もポジティブな感想は多いが、紙芝居の場合と比べるとネガティブな感想も多いことがわかった。本結果に特徴的なこと

表1 紙芝居で物語を聞いた場合の感性分析の結果

| | | |
|---------------|------------|---|
| ポジティブ (76) | 安心 (1) | 「ほら、ね、こんなふうに」→この言葉で参加をもとめるような感じ。また、安心できる。絵が大きくて見やすい。文字がない分、集中しやすい。(ID:70) |
| | 快い (2) | 心があたたかくなりました。話し手の声があたたかくて、ひよこちゃん頑張って！と応援したくなる話でした。(ID:85) |
| | 良い (30) | 物語の世界に入り込んでみる事ができました。場面の切り変わり方などでも印象が伝わってきてよかったです。(ID:9) |
| | 満足 (31) | 絵本と違って舞台があるので最後にひよこがみえて印象に残りやすいと思った。また大きくて見やすいと思った。(ID:40) |
| | 楽しい (8) | 絵が大きく画面に出ているのでわかりやすかった。なにが起きたのかパッと見ただけでわかる。見ていて楽しいのは紙芝居だった。(ID:104) |
| | 褒め・賞賛 (13) | 絵がきれいですてき。(リアル) (動きが伝わる) 大人数の場合は、紙芝居の方が大きくダイレクトに伝わってきた。(ID:101) |
| | 期待 (1) | イラストに温みを感じました。また、ひよこちゃんのぼうけん心が伝わってきてワクワクしました。(ID:99) |
| | 喜び全般 (1) | 絵本とは違う優しいタッチのイラストだったので、見ていて優しい気持ちになれた。(ID:108) |
| | 対応が親切 (1) | 紙芝居の抜く方向などの特性をいかした絵の向きでつくられていることに細かな配慮を感じました。(ID:41) |
| | 楽しみ全般 (2) | 紙芝居の方が絵が大きくて迫力があつた。ネコやカエルが出てきた時のおどろきがあつた。(ID:72) |
| ネガティブ (2) | 好き (1) | 紙芝居は「演じる」と言う事がとても伝わってきます。私たち、聞いている人の方を向いて読んでいる方が私は好きです。紙芝居にはたくさんの意味がこめられている。(ID:33) |
| | 不満 (2) | おんどのり力強さが伝わる。紙芝居の良い所である。舞台から飛び出し広がるように感じたが、絵本の方が良かった。(ID:51) |

表2 絵本で物語を聞いた場合の感性分析の結果

| | | |
|---------------|-----------|---|
| ポジティブ (43) | 快い (2) | 絵が優しい色でぬられていて、あたたかい感じがした。(ID:20) |
| | 良い (24) | 絵本は紙芝居よりも次の場面に移る速さが速いのでストーリーの中に入りやすい。途切れないから聞きやすかった。(ID:24) |
| | 満足 (11) | ひよこの親への憧れの気持ちが伝わってきた。ストーリーが比較的つながっているように感じたので聞きやすかった。(ID:102) |
| | 楽しい (3) | 絵本の方がおもしろかったというか、本の絵の中に引きこまれるかんじでした。(ID:77) |
| | 褒め・賞賛 (9) | こんな虫や母さんなど、すぐに見つけることができました。うら表紙があるので、まとまりがあつて良かったと思いました。絵本の方が伝わりやすかったです。(ID:25) |
| ネガティブ (25) | 好き (3) | 私は絵本の方が伝わりやすいなーと思った。絵本の方がひよこの小ささが実物と同じくらいに感じられて、絵本の方が好きだ。(ID:84) |
| | 不快 (1) | 先に紙芝居をみたせいで、少し違和感があつた。数人の前で読む方が絵本は向いていると思った。(ID:105) |
| | 不満 (15) | 文字と絵が半分ずつなので、文字のページを見たり、絵のページを見たりして、絵本の世界に入りにくかったです。(ID:29) |
| | 批判 (1) | 紙しばいに比べると絵が小さく、みにくかったです。ですが、細かくかかっている為、立体感がありました。(ID:31) |
| | 悪い (8) | 絵本は、小さいのであまり絵が伝わらずストーリーの理解も分かりにくい。(ID:35) |

は、絵本で物語を聞いた場合にネガティブな感想が多いことである。その理由として、表2に掲載した記述例から3つのことが推察できる。

まず、大きさである。表2の感想には「紙しばいに比べると絵が小さく、みにくかったです。」(ID:31)、「絵本は、小さいのであまり絵が伝わら

ずストーリーの理解も分かりにくい。」(ID:35)とあつた。紙芝居と絵本の大きさの違いを知らない保育者や学生はいないが、実際に同じ物語で比較して聞いてみることで、紙芝居と比べると絵本は見にくいという大きさの違いを実感したのであろう。このため、絵本に対するネガティブな感想

につながったものと思われる。

次に、構成である。紙芝居は表に絵があり、裏に脚本があるが、絵本にはこのような区別はない。そのため、「文字と絵が半分ずつなので、文字のページを見たり、絵のページを見たりして、絵本の世界に入りにくかったです。」(ID:29) というような感想があった。紙芝居と絵本で物語を聞くという比較を実際に体験してみると、絵本は使いにくい側面もあることを理解し、ネガティブな感想に至ったものと思われる。

最後に、対象人数である。紙芝居も絵本も同じような使い方をしている保育者が多いことが先行研究で示されているが、紙芝居と絵本を実際に比べてみることで「数人の前で読む方が絵本は向いていると思った。」(ID:105) というように、大人数の前で絵本を読む難しさに気が付いていることがわかる。富田(2011)も、絵本は個性が高く大人数の読み聞かせにはあまり向かないが、紙芝居は集団への読み聞かせには有用性が高いことを指摘している。対象人数が多い場合は絵本を用いた読み聞かせが難しいこと、あるいは紙芝居の利便性に気が付いたことが、ネガティブな感想につながったものと思われる。

(2) KH Coder 3による分析

次に、KH Coder 3による分析結果として、抽出語一覧（出現回数が10回以上の語）を表3、紙芝居のポジティブな感想の共起ネットワークを図1、絵本のポジティブな感想の共起ネットワークを図2として整理した（表3、図1、図2）。

表3の抽出語一覧をみると、紙芝居で物語を聞いた場合のポジティブな感想の頻出語として13語が抽出された。また、絵本で物語を聞いた場合のポジティブな感想の頻出語は10語、ネガティブな感想の頻出語は5語であった。ここから、紙芝居と絵本による物語がどのように捉えられたかがわかる。

まず、紙芝居では、3つの特徴的な言葉に着目したい。最初に、出現回数の上位にある「伝わる」という言葉である。この言葉は絵本には出現していないことからすれば、紙芝居と絵本で同じ物語を聞き比べた場合、紙芝居の方が物語の内容が伝わっていたようである。実際、図1の共起ネットワークによると、「伝わる」という言葉が「紙芝居」という言葉と強く結びついていた。このように、絵本より紙芝居の方が物語が伝わると捉えられたことがわかる。

表3 KH Coder3による抽出語一覧（出現回数が10回以上の語）

| 紙芝居で聞いた感想 | | | | 絵本で聞いた感想 | | | |
|-----------|------|-------|------|----------|------|-------|------|
| ポジティブ | | ネガティブ | | ポジティブ | | ネガティブ | |
| 抽出語 | 出現回数 | 抽出語 | 出現回数 | 抽出語 | 出現回数 | 抽出語 | 出現回数 |
| 絵 | 57 | | | 絵本 | 35 | 紙芝居 | 14 |
| 紙芝居 | 42 | | | 絵 | 21 | 絵 | 11 |
| 伝わる | 38 | | | 思う | 19 | 小さい | 11 |
| 大きい | 35 | | | 紙芝居 | 19 | 絵本 | 10 |
| 思う | 28 | | | 感じる | 13 | 見にくい | 10 |
| 見る | 27 | | | 細かい | 13 | | |
| 絵本 | 21 | | | 読む | 13 | | |
| 感じる | 21 | | | ひよこ | 11 | | |
| ひよこ | 17 | | | 小さい | 11 | | |
| 場面 | 12 | | | 優しい | 11 | | |
| 分かる | 12 | | | | | | |
| 違う | 10 | | | | | | |
| 迫力 | 10 | | | | | | |

注：「紙芝居で聞いた感想」の「ネガティブ」には出現回数が10以上の語はなかった。

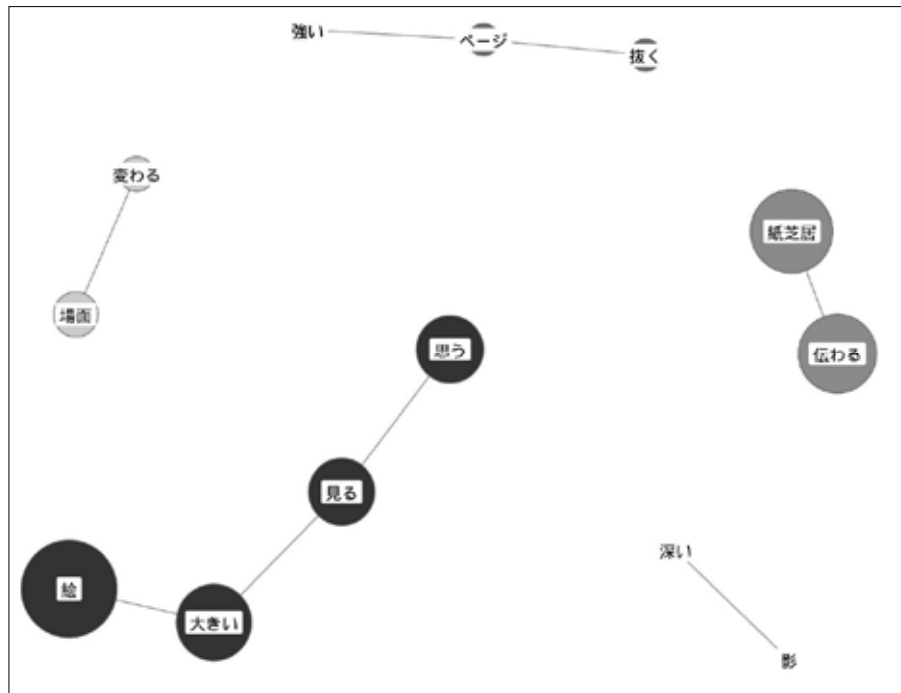


図1 紙芝居で聞いた感想（ポジティブ）の共起ネットワーク図

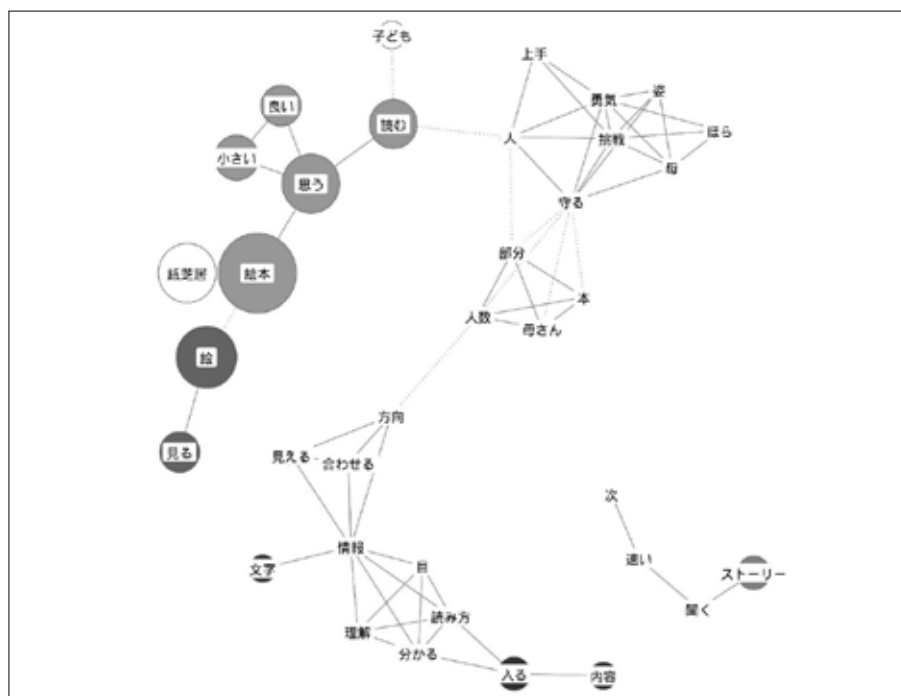


図2 絵本で聞いた感想（ポジティブ）の共起ネットワーク図

次に、「大きい」という言葉である。紙芝居の画面の大きさについてポジティブな感想が示されていた。紙芝居と絵本の大きさを比較することで、絵がはっきりと見えたり、作品中の登場人物の動きや躍動感を感じたりする経験ができたようである。これは、「迫力」という言葉が紙芝居に

は出現していることからわかる。図1の共起ネットワークを確認すると、「大きい」という言葉は「絵」や「見る」という言葉と結びついていた。紙芝居は画面が大きいため絵が見やすいという捉え方をされたことがわかる。

最後に、「場面」という言葉である。場面の切

り替えに対して意識が向いていることがわかる。これには、紙芝居を抜くという行為が関係している。八幡（2007）は、抜くことは紙芝居を演じるうえで重要な位置を占めると指摘している。抜くことによって、場面の動き、切り替えが明確になるからである。図1の共起ネットワークでも、「場面」という言葉が「変わる」という言葉と結びついていた。絵本には「場面」という言葉は出現せず、紙芝居に特徴的な言葉である。紙芝居を抜くという行為によって、紙芝居には場面の動きや切り替えがあると捉えられたことがわかる。

次に、絵本では2つの特徴的な言葉に着目する。まず、「読む」である。紙芝居には出現していないことから、絵本は大人数に対して使うより、個人的に読む方がよいと捉えられたことがわかる。これは、絵本に関するネガティブな抽出語として、「小さい」、「見にくい」という言葉が出現していたことから裏付けられる。図2の共起ネットワークでも、「読む」という言葉は「紙芝居」とは関係が薄く、「絵本」と結びついていた。また、「読む」には「子ども」という言葉も結びついていた。これは、紙芝居は主に大人が子どもに演じるものであるのに対して、絵本は子どもが自分で読むことができるという違いを理解したことの表れであろう。このように、紙芝居と絵本を比べることで、紙芝居の集団性と絵本の個別性の違いが捉えられたことがわかる。

次に、「小さい」である。紙芝居の特徴でもあった「大きい」に対して、絵本では「小さい」という言葉が出現していた。紙芝居で物語を聞く場合と絵本で物語を聞く場合を比べることで、絵や画面の大小に意識が向きやすくなることがわかる。ここで重要なことは、「小さい」という言葉がポジティブな感想にもネガティブな感想にも出現することである。絵本が「小さい」というのは絵本の良さでもあり、難しいところでもあることを意味している。

絵本のポジティブな抽出語をみると、「小さい」に類似する言葉に「細かい」、「優しい」という言葉がある。絵本は紙芝居より絵が小さいことで、

絵の細かさが伝わりやすくなり、それが登場人物やキャラクターなどの優しい雰囲気につながっていると捉えられているのである。このように「小さい」ことが肯定的に捉えられていることは、図2の共起ネットワークからも「小さい」という言葉が「良い」という肯定的な言葉と結びついていることからわかる。

しかし、「小さい」ことが絵本の否定的な評価につながっているところもある。表3の「絵本で聞いた感想・ネガティブ」の抽出語を見ると「小さい」に次いで「見にくい」という言葉が出現している。紙芝居は大きく、見やすく、迫力があるとあったが、絵本では絵が小さいために見にくいという評価になっていた。先に確認した表2でも、絵本は小さくて見にくいという記述があった。このように、絵本に対する「小さい」という評価は、肯定的にも否定的にも捉えられたのである。

以上の分析結果から、同じ物語を紙芝居と絵本で聞いた場合の捉え方の違いについて次のことがわかった。紙芝居で物語を演じた場合、紙芝居は絵本より物語が伝わりやすいこと、画面が大きく見やすいこと、場面の動きや切り替えがわかりやすいことという捉え方をされることである。また、絵本で物語を読み聞かせをした場合、絵本は個人的に読むものである（大人数対象には向かない）こと、紙芝居と比べて絵が小さいため繊細さや優しさが伝わる一方で大人数を対象とした読み聞かせの場面では見にくいという捉え方をされることが明らかとなった。

4 まとめと今後の課題

本稿の目的は、同じ物語を紙芝居で演じた場合と絵本で読み聞かせた場合で、物語の受け止め方にどのような違いが生じるかを明らかにすることであった。分析結果として、紙芝居で演じた場合はポジティブな感想が多く、ネガティブな感想はほとんどなかった。しかし、絵本で読み聞かせた場合はポジティブな感想が多かったが、ネガティブな感想も紙芝居と比べると多くあった。

それぞれを詳細にみると、紙芝居で演じた場合は、絵本で読み聞かせた場合より伝わりやすい、画面が大きく絵が見やすく迫力がある、場面の動きや切り替えがよくわかると捉えられていた。一方で、絵本で演じた場合は、絵本は個人的あるいは少人数で読むほうが適している、紙芝居と比べると絵が小さいく優しい感じがするが大人数を対象にした際には見にくいと捉えられていた。

以上の結果をふまえると2つの示唆が得られる。まず、紙芝居と絵本の使い分けの重要性である。分析結果をみると、紙芝居と絵本それぞれに特徴的な体験をしたことがわかる。紙芝居では、大きな画面の中の登場人物やキャラクターの躍動感や迫力、あるいは場面が動き、切り替わることでいま目の前で物語が生じているような体験をすることができた。一方で、絵本は紙芝居と比べると小さくて見にくいという感想もあったものの、絵が小さいことが、物語の繊細さや優しさを伝えることになっていた。このように、紙芝居と絵本では得られる体験が異なるのである。

しかし、保育者の多くが紙芝居と絵本の違いを理解しないまま同じように扱っていることがわかっていく。紙芝居と絵本を同じように扱うことは、紙芝居と絵本の違いを生かし、体験の違いを作りだすことができなくなることを意味する。乳幼児期の子どもはたくさんの多様な体験をすることが好ましいが、紙芝居と絵本の違いを理解しないまま同列に扱ってはいは子どもの体験も豊かなものにはならない。紙芝居と絵本を使い分けた保育は、子どもの体験を充実させるためにも必要なのである。

また、紙芝居と絵本の使い分けについて分析結果には反映されなかったことにも着目する必要がある。たとえば、分析結果として、舞台の有無による物語の捉え方の違いや紙芝居を演じる際の演技力に関するものは得られなかった。紙芝居は劇であるため、舞台や演技力、演ずる技術が必要であるが、これらについては分析結果として得られなかった。しかし、多くの先行研究が指摘しているように、舞台や演技力は紙芝居の魅力や教育的

な効果を引き出すために必要なものである。紙芝居と絵本の使い分けを説明する際には、こうしたことが学ぶ側の認識や理解から抜け落ちやすいことをふまえたうえで説明や伝達をしていく必要がある。それが、保育の中での紙芝居と絵本の適切な使い分けにつながる可能性を高めるのである。

次に、紙芝居に関する実証的な研究の必要性である。本稿では紙芝居と絵本の違いを理解することや使い分けの重要性を指摘してきたが、これまでも指摘されてきたことでもある。しかし、説明を受ける側や学ぶ側にとってそれがどのように理解され、受け止められているかについては検討されてこなかった。それゆえに、紙芝居と絵本の違いを説明するさい、どこに力点を置き、それを伝えるためにどのような説明がわかりやすいかという紙芝居と絵本の違いを理解する側の視点から説明することが十分ではなかった。このように、説明はされているが十分に伝えきれていないということが、紙芝居と絵本を同じように扱うという結果を招いたのではないだろうか。

たとえば、紙芝居で物語を聞いた場合のポジティブな感想として、場面を意識するようになるとあった。こうした結果をふまえれば、紙芝居には抜くという行為があり、絵本はページをめくるという行為があるという平坦な違いの説明で終わるのではなく、場面の捉え方の違いがわかるような説明をするほうがその違いが理解されやすく、印象に残るであろう。また、紙芝居の中には、抜き方や抜いている場面と次に場面の重なり工夫がされているものもあるが、絵本にはこうした特徴はほとんどないことを説明することも考えられる。

また、絵本についても同様である。紙芝居に関する多くの書籍では、絵本は紙芝居と比べると画面が小さいということが指摘されており、分析結果からも絵本で物語を聞いた際には画面が小さいという感想が多くあった。しかし、同時に画面が小さいからこそ絵本のよさ（繊細さ、優しさ）を感じていることもわかった。こうした結果をふまえれば、紙芝居と絵本では画面の大きさが異なるという説明だけで終わるのではなく、紙芝居は動

きがあり迫力があるが、絵本は繊細さ、優しさを伝えやすい、だから保育の場面でいまだどちらが必要かを考えることが重要であるというような説明も可能ではないだろうか。

このように、実証的な研究によって紙芝居を学ぶ側が紙芝居をどのように理解し、絵本との違いをどのように感じているかを明らかにしていく必要がある。それは、紙芝居の魅力や重要さ、価値を繰り返し一方的に伝えるだけではこうした状況は改善されないからである。紙芝居と絵本の違いやそれぞれの特徴について、どのように説明すれば理解されやすくなるかという説明を受ける側の視点が重要であり、そのためにも学生や保育者のような紙芝居の説明を受ける側、紙芝居を学ぶ側の現状や課題に関する実証的な分析が必要になるのである。

今後の課題として、分析の精緻化がある。本稿では保育経験のない学生による自由記述を分析対象としたが、保育者としての保育経験がある保育士や幼稚園教諭を対象とした分析が必要である。保育経験の有無によって、紙芝居と絵本の違いの理解が異なるか否かを明らかにすることは、その説明や伝え方に影響を及ぼすからである。

また、本稿の分析結果について、なぜこのような結果になったのかについては検討できていない。たとえば、紙芝居には絵本と異なり舞台が必要であることや演技力が必要であるということは授業内で伝えられたが、分析結果として得られなかった。紙芝居と絵本の違いに関する情報の選択的な理解について、なぜ、どのような要因が関係しているかを分析する必要がある。これらは今後の課題として取り組んでいきたい。

注

- (1) CiNii による論文検索で絵本と入力して検索すると 8,129 件が検索結果として表示されるが、紙芝居は 1,148 件が検索結果として表示されるのみである（最終検索日 2018 年 3 月 17 日）。単純に論文数だけ比べてみても、紙

芝居に関する研究は絵本の研究と比べると少ない。

- (2) 紙芝居の先行研究は、理論的・理念型追求的研究と実証的な研究に大きく分けることができるが、これまでの研究の多くは理論的・理念型追求的研究であった。紙幅の都合もありすべてを列挙できないが、前者は、歴史的な位置づけや教育的な意義の変遷やあるべき姿の研究（髯櫛・種市 2005、髯櫛・種市 2006、石山・佐々木 2006、髯櫛・野崎 2009、佐々木 2016）、紙芝居の理想的な実演方法など実践的な研究がある（佐々木・野村・石山 2005、柳田 2016）。後者は、保育者や保育者養成校の学生を対象として紙芝居や舞台の使用頻度などを問う質問紙調査を中心とした実証的な研究がある（髯櫛・野崎 2010a、髯櫛・野崎 2010b、髯櫛・野崎 2011、野崎他 2012、大元 2013、正司 2015、正司・渡邊 2017）。
- (3) 舞台の使用に関しても言えることである。紙芝居の実演家は舞台の重要性や意義を指摘しているが、舞台がある場合とない場合では物語の伝わり方がどのように違うか、聞き手の理解にどのような差が生じるかという研究はない。多くの保育士が舞台を使用しないで紙芝居を演じるのは、舞台を用意するという行為が心理的、物理的な負担であるからと推察される。もしそうであるなら、舞台の重要性や意義を一方的に説明してもあまり効果的ではない。舞台の有無によって物語の効果や理解が異なるということを実証的に明らかにし、こうした結果とあわせて舞台の重要性や意義を伝えていく必要がある。
- (4) 浅井・浅井（2018）による研究では、保育士が紙芝居と絵本の違いを理解することが、保育の中で紙芝居を活用する可能性を高めることを明らかにしている。本稿では紙芝居と絵本による物語の受け止め方の違いについて検討するが、こうした紙芝居と絵本の具体的な違いとそれに伴う効果が実証的に裏付けら

れていくことが、紙芝居と絵本の使い分けにつながると思われる。

- (5) 記述内の明らかな誤字脱字は修正し、分析に用いた。
- (6) 感性分析の結果を確認し、明らかに分類が不適切なものに関しては分類から削除した。また、この結果、カテゴリ自体を削除したものもある。確かに、自動的な分類に委ねることで客観性を担保できるが、分析目的に合致する合理的な修正については分析の精度を高めるために必要であるため、こうした手順を採用した。
- (7) KH Coder 3の開発者である樋口耕一によると、単純化すれば Jaccard 係数が 0.3 であれば単語間に強い関連があると考えられることができるとしている。このため、本稿では 0.3 と設定した。
- (8) 複数のカテゴリに分類されているものもあるため、上位カテゴリの合計数と一致していない場合もある。また、数字はレコード数を示している。

引用文献

- 浅井拓久也・浅井かおり (2018)、「紙芝居に対する保育士の学びと活用の関係に関する研究—どのような学びが紙芝居の活用につながるか—」、『未来の保育と教育：東京未来大学保育・教職センター紀要』(5)、印刷中。
- 髙橋久美子・種市淳子 (2005)、「保育におけるメディアとしての紙芝居—紙芝居通史を中心に—」、『名古屋柳城短期大学研究紀要』(27)、53-67。
- 髙橋久美子・種市淳子 (2006)、「保育のなかの紙芝居—倉橋惣三と「紙芝居」の関わりを中心に—」、『名古屋柳城短期大学研究紀要』(28)、95-105。
- 髙橋久美子・野崎真琴 (2009)、「戦時下における紙芝居に関する議論—雑誌『紙芝居』を中心に—」、『名古屋柳城短期大学研究紀要』(31)、43-55。
- 髙橋久美子・野崎真琴 (2010a)、「保育現場における紙芝居の活用状況」、『名古屋柳城短期大学研究紀要』(32)、65-75。
- 髙橋久美子・野崎真琴 (2010b)、「保育者養成課程における紙芝居—学生のアンケート調査を通して—」、『名古屋柳城短期大学研究紀要』(32)、77-86。
- 髙橋久美子・野崎真琴 (2011)、「保育者養成課程における紙芝居その2—学生のアンケート調査を通して—」、『名古屋柳城短期大学研究紀要』(33)、57-66。
- 石山幸弘・佐々木靖章 (2006)、「立絵紙芝居の始発期に関する文献について」、『茨城大学教育学部紀要人文・社会科学・芸術』(55)、37-46。
- 金城久美子・掃盛純一郎 (2016)、「紙芝居」、古橋和夫編著 (2016)、『保育者のための言語表現の技術—子どもとひらく児童文化財をもちいた保育実践—』、萌文書林、117-132。
- 厚生労働省 (2018)、「保育所保育指針解説」。
- 野崎真琴・小島千恵子・髙橋久美子・水落洋志 (2012)、「紙芝居に関する保育者の意識と活用状況」、『名古屋柳城短期大学研究紀要』(34)、87-96。
- 大元千種 (2013)、「保育現場における紙芝居の活用の課題—保育学生の紙芝居経験を手掛かりとして—」、『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』(8)、177-188。
- 佐々木靖章・野村たかあき・石山幸弘 (2005)、「紙芝居の実践指導研究—「演技する声」の問題」、『茨城大学教育実践研究』(24)、59-73。
- 佐々木由美子 (2016)、「保育における紙芝居をめぐる言説：紙芝居の導入時期と紙芝居観の変遷を中心に」、『東京未来大学研究紀要』(9)、53-62。
- 清水美智子 (2007)、「紙芝居「演じることと語ること」—紙芝居のもつ特徴と効果を探る—」、『名古屋柳城短期大学研究紀要』(29)、39-

48.

正司顯好（2015）、「紙芝居の現状と課題 幼児教育における可能性：埼玉県幼稚園・保育園を中心に実施したアンケート調査に基づいて」、『小池学園研究紀要』（13）、13-23.

正司顯好・渡邊裕（2017）、「新人保育士と保育所長の紙芝居に対する考え方とその相違に関する分析」、『小池学園研究紀要』（15）、1-9.

富田久枝（2011）、「保育教材（絵本と紙芝居）の教育効果と有用性の検討：読み聞かせ時の子どもの反応からの検討」、『日本教育心理学会総会発表論文集』（53）、374.

八幡眞由美（2007）、「児童文化財の保育における効用に関する一考察：領域言葉の側面から紙芝居を中心に」、『上田女子短大紀要』（30）、39-47.

柳田多聞（2016）、「異なる演者による紙芝居上演に対する観客の注目の差異」、『長崎県立大学国際社会学部研究紀要』（1）、135-144.

浅井拓久也（秋草学園短期大学准教授）

正司顯好（埼玉東萌短期大学教授）

